

## 鹿児島県国語教育史研究 II

—「我等の學園132号」を中心にして—

新名主 健 一

(一九八六年十月十五日 受理)

### I

「我等の學園」は明治・大正・昭和にわたり、少なくとも（確認できる最終号は「47号」である。）「47号」もの刊を重ねた学校詩文集である。正確には校友会々誌である。その創刊は明治三十八年十月である。体裁は菊版活版刷である。

その存在を確認できたものは次に記す十七冊である。

六號・第十七號・創立三十週年記念号・昭和三年六月・123・創立四十周年号・第百二十八號・129・132・133・134・141・143・144・145・146・147

この「我等の學園」が詩文集として体裁を整えはじめたのは磯長武雄<sup>注1</sup>（市尋高在職・昭和三年三月三十一日〜昭和七年三月三十一日）が編集しはじめてからであった。もちろん単なる詩文集としての体裁は明治期の二号は備えている。しかしその詩文集が次第に学校教育報告に傾き、「児童文は稍ともすれば副次的な存在として編輯される」<sup>注2</sup>ようになった。磯長はこれを「児童文集」として編集し「綴方教育建設の場として、文話・詩話・評語・合評記事等の掲載」に努めたのであった。つまり磯長

## The History of Japanese Language Education in Kagoshima Prefecture Schools II

— A Study of "Warera no Gakuen No. 132" —

Ken'ichi SHINMIYÖZU

は単なる校友会々誌を教育的な学校詩文集へ変えたのである。この頃から全国的な注目をあびるようになり「就中科學的綴方号として編輯した百二十號は菊池知勇氏をして日本一の文集として讃嘆せしめた」<sup>注3</sup>のであった。この「科學的綴方号」を特集したのは磯長武雄である。次に「調べた綴方号」を外園郁也が特集している。この後に学習の綴方号が特集されることになる。この間の事情について副田氏（市尋高在職大正十五年四月〜昭和十七年九月）は次のように記している。

とにかく私たちは「学習の綴方」を主張した。それは我れ<sup>注4</sup>自らの手で「我等の學園」の「科學的綴方特集号」や「調べた綴方特集号」を積重ねていつて最後に到達し打建てた私たちの金字塔であった。（『学習の綴方』を語る）19P「鹿児島県国語教育 第四号」鹿児島県国語教育研究会・昭和三十一年）

その「学習の綴方」特集号は昭和九年十二月に発行されている。現存している最も近い号から逆算すると130号である。この号は現在のところ、その存在を確認できていない。しかし132号（昭和十年七月）は綴方を第一部・第二部と分けていて、第一部は一般作品、第二部は学習の綴方である。したがって第二部を検討することによって学習の綴方の輪郭は明らかになる。副田氏によると「学習の綴方特集号」はすべ

ての作品が学習の綴方であったのだが、一三三号を編集する時、このまま学習作文を終わらせてはいけないということで、学習の綴方の部を設けたということである。

作文集第二部の中身は次のようになっている。尋一は見出しは掲げていないが番号作文（1・2・3ノツヅリカタ）、尋二はすきなべんきゅう、尋三は読方の学習、尋四は学習の綴方、尋五は学習法の綴方、尋六は調べた綴方となっている。

そこで本稿では、「学習の綴方特輯号」とほぼ同じ体裁と考えられる「我等の學園 一三三号」第二部を詳細に検討しながら、「我等の學園」が当時の市尋校の学校教育活動の中でどう位置づけられていたか、当時の綴方教育運動の中にあるような意義があったのか、当時の鹿児島県内における実践家達に与えた影響はどうであったか、「学習の綴方」実践の現代的意義はどのようなところにあるのかを探っていくことにする。

## II

「我等の學園 一三三号」の作文集第二部は先にふれたように各学年の綴方を、「すきなべんきゅう」「讀方の學習」等の見出しの下に掲載している。

尋一は「オトウサンノツクエノウヘ」「ボクノウチ」「オカアサンノコト」「ダイドコロノオハナシ」「オダイドコロノオハナシ」の五点が掲載されている。例を示そう。

オトウサンノツクエノウヘ

一ノ組 ナガタ ニヘイ

- 1 ソロバンガアル。
- 2 スズリイシガアル。
- 3 コガタナガアル。
- 4 フデガアル。
- 5 ペンガアル。
- 6 エンピツガアル。
- 7 カキツケガアル。
- 8 ギツタガアル。
- 9 ベンセンガアル。
- 10 ノリガアル。
- 11 ボクジウガアル。
- 12 インキガアル。
- 13 インキスタンドガアル。
- 14 ホンガアル。
- ……（略）……
- 26 マッチガアル。

（指導者 勝目先生）  
略……引用者

指導者は一ノ組担任の勝目先生である。「我等の學園」では綴方部以外の先生も必ず作品の後に指導者として名前が掲載されている。昭和三年六月刊のものは作者名・指導者名もはいっていないが、一三三号（昭和七年七月）では掲載されている。おそらく指導者名として担任名を入れることにより綴方教育の啓発―大衆化―を図る目的で、磯長により一三五号（昭和四年七月號）あたりからはじめられたと考えられる。副田氏は後年次のように記している。

当時は、綴り方の指導というものは、文学を愛好し、作家を夢見、あるいは詩を書き、短歌を作るといような先生方によってなされる特別な学習指導のように考えられていた。したがって綴り方教育は不振であった。このことはやがて磯長武雄等によって「綴り方教育の大衆化をどうするか」という問題で全国的に取りあげられていくことになる……

「教育研究」92 P 鹿児島県教育研究所 1964・6

傍点……引用者

すなわちこの指導者名記載は綴り方教育の大衆化の一方策と考えられるのである。

番号作文については別に項を設けてその成立事情・歴史的変遷・意義を検討することにする。

尋二はすきなべんきやうの見出しの下、「かうかう」「よみかたのべんきやう」「さんじゅつのおべんきやう」「しゃうか」「こうま」「手工」「あめふり」の七点を掲載している。「かうかう」は修身、「よみかたのべんきやう」は國語、以下算術、唱歌、手工、「あめふり」は図画の時間の学習についての作文である。学習の成果・経過・様子・喜び・感動等が綴られている。

尋三は「讀方の學習」の見出しの下「讀方のふくしう」「天照大神」「朝顔」「かん字の勉強」「たん文の勉強」「おたまじゃくし」の八点が掲載されている。家庭学習や教材の学習を終えての感想、擬人文のけいこなどである。作品のあとに「二年生と三年生のつづり方をよんで」という副田氏の評がある。要約すると次のようなことが記されている。

①べんきやうのことをこんきよくくはしく思ひ出して書いてゐるのがいい。

②くはしく思ひ出して書いていくとべんきやうのことがよくわかって來てべんきやうがおもしろくなる。そしてつづりかたもおもしろくなっ

て上手に書けるやうになる。

尋四は「學習の綴方」の見出しの下「そろばんのけいこ」「修身の綴方」「理科の時間」「書方」「クロッキー」「讀方の學習」「お裁ほう」の七点が掲載されている。「四年生の學習の綴り方を讀んで」という評で副田氏は、各作品に対する評をした後、「とにかく自ら意氣こんで考へて工夫した學習の綴り方がほしい。」と記している。

尋五は「學習法の綴方」の見出しの下、「うちでの算術學習」「國史の勉強」「地理學習法」「修身の學習」「蚊卵發見の苦心」「讀方の學習」「始めてのお作法」の七点が掲載されている。「五年生の學習法の綴方總評で副田氏は「算術の學習法」「蚊卵發見の苦心」以外は課題の精神と幾分かけはなれているとしている。そして「學習法といふことは、或ることをわかる爲めに、どんなにしたら一番正しくハッキリよくわかるか、わかることへの道を研究し發見することであると思ふ。そして其の道を發見し遂行することに依つてわかることの喜びを味はふことであると思ふ。」としている。

尋六は「調べた綴方」の見出しの下、「新校舍愛護法」「夏の遊び」「夏の動物」「梅雨の研究」「夏の草花」「夏の野菜」の六点が掲載されている。「六年生の調べた綴方總評」では「みんなよく、實際に苦心して調べ、考へた後がハッキリ出てゐて嬉れしかった。」とある。

さて作文集・第二部を概観してきたが、それぞれの綴方のうち、番号作文と學習の綴方を次項以下で順に、その成立事情・内容・歴史的変遷等について検討していきたい。

### III

「わたしが始めて番号作文を考えたのは、昭和八年のことです。」

「ばんごうさくぶん」49 P・副田凱馬・南日本教育図書出版」ということと符号して、「我等の學園」に番号作文が登場するのは「128号（昭和九年三月）からである。その前の「124号（昭和七年十二月）」には、まだ出ていない。番号作文の成立事情について副田氏は次のように記している。

結論的にいえば、「番号作文」というのは、作文の時間に、①書くことがない。②何を書いてよいかわからない。③書き方がわからない。と、途方に暮れ、その途方に暮れることから作文に背を向ける子供たちに対して「こうして見付けてごらん。思い出してごらん。書くことはいくらでもあるよ。」「こうして書いてごらん。書くこと、ちっとも難しいことではないだろう。」と、題材や文材の見付け方、文の書き表し方を手引きし、子供たちを作文嫌いから抜け出させ、作文好きにまで高めることを意図するところから生まれた作文であり、作文学習である。」

「番号作文について」〔国語教育実践の開拓〕65 P所収・博報児童教育振興会編・明治図書・1983）

またその中身について概略次のように記している。

①番号作文というものは一つ一つの文の頭に番号が付いている作文のことである。

②番号は作文するとき、見付け出したり見い出したりして書き並べる文の順番の数でもあり、見付け出したり思い出したりした事柄の数でもある。

③先生は、番号数の多いのに『よい点』を付けてあげる。

（前記本65・66 P）

このことは「128号（昭和十年七月）の一年の綴方を総評している「一ネンセイノツヅリカタ」において次のように記していることから当初からの考えであったことがわかる。

「123……ノツヅリカタ」デハ「123……」ガイバンタクサンナランダノガ、イチバンヨイノデス。「123……」ヲタクサンナラベルニハ、イツモ「モウナイカ」「マダナイカ」トイッテヨウク

ミテ

カンガヘテ

サガシダスノデス

（132号63 P）

すると子供たちは「文材集めに、その書き並べに張り切るのである。」副田氏の学習指導の根底は「躍る心」を学習の土台に据えるということである。氏は言う。

『わたしは、作文の学習指導は子供たちの「躍る心」（感動）をかき立て「躍る心」で作文させることだと思っている。』（前記本66 P）この番号作文は当初児童に対しては「123ノツヅリカタ」とよばれたり「番号付け綴方」とよばれたりしている。昭和47年になると「ばんごうさくぶん」の名称になっている。

さて、この番号作文の方法には、①「128号にある（ジン一ノリモノノイロイロ一クミ合作）ようにある題名について、児童一人一人思いつくことをあげさせて合作の形をとる場合。②次の段階として自分一人で、みんなで考えたようにたくさん見つけ出して、考えて書く場合。の順序・場合がある。

さらに作文の基底学習として、漢字や語句の消化学習<sup>注4</sup>として書かせる番号作文を「かん字作文」「ことば作文」とよんでいる。「かん字作文」「ことば作文」は「番号作文」を支えるものとして位置づけられるのである。

番号作文については、「綴方倶楽部」に「エラクナルツヅリカタ」の題で出した旨の記述（私の作文教育あれこれ）75 P副田凱馬）があるが見である。したがって「我等の學園」128・132・141号の

創案期とも言える頃の文献と「ばんごうさくぶん」(昭和47年)と「番号作文について」(1983)の最近の資料を基にしたがために、その間の実践期とも言える文献は検討できなかった。後日不備を補いたい。

ただこの番号作文を検討していく中で、番号作文の発想や方法が驚くほどKJ法やブレインストーミング法と似ていることに気づいた。KJ法・ブレインストーミング法ともにカードを使うところが特徴であるが、そのカードは番号作文における番号に相当する。しかもカード操作と同様の手順を番号作文はとり、「同質のもの固まりを、時の流れや、固まりのかかり合いの順にあと先を考えて並べるとレンコンのような固まりのつながりができる」(「ばんごうさくぶん」52P)としている。

KJ法やブレインストーミング法にくらべてやや平板になるきらいはあるが、もしKJ法やブレインストーミング法を小学校一年生に教えるとしたら、この番号作文のような形をとるのではないかと思われる。

このKJ法・ブレインストーミング法との関係については後日材料が整い次第検討していきたいと考えている。

#### IV

学習の綴方特集号は昭和九年十二月に出されている。号数は先の推定によれば130号である。この号について当時「綴方教育」の主幹であった菊池知勇は次のように記述している。

学習の綴方は何も鹿児島小學校が最初に唱えたとは限らない。從來に於てもかうした綴方は作られて来たのであるが、然し、これ程各教科を網羅して一つの文集に集め得たものは恐らく全國に此の文集を於いて外に無いであろう。此の学習の綴方が将来如何に發展させられて行くであろうか。私は次の學園を期待するものである。

「學習の綴方」副田凱馬(「鹿児島教育」60P所収・昭和十一年八月鹿児島縣教育會)

これに対し副田氏は次のように記している。

成程、今までに於いても「試験」とか何とかの題材を書かれたものは相當にあった。然し、それは時間が足りずに胸がドキドキしたとか、或は又問題が難しかったのか易かったのかといふことのみに止まり、如何なる問題が出て、それを如何に思考し如何に解答したかの實際過程を考察することはおろそかにされて来たのであった。即ち、作者が自分の學習の姿(學習行動・學習心理)をハッキリ掴み出し、反省し、批判する態度でなかったのである。尤も讀方教材に於ける或種の感想文とか、理科實驗等の或物などには多少私共のいふ學習の綴方の一少部に入ってくるものもないではないが、それとも作者及び其の指導者に於いて學習の綴方精神に立脚したものではなかった。

前記本61P

そして自ら唱える學習の綴方の意義・独自性について次のように記している。

其處に行くとも學習の綴方はあくまでも研究しつつある自己の姿を寫すことが中心になる。文面に登場するのは躍動しつつある自己の姿である。生活を自己を眞剣に建設しつゝある我自身の姿である。此處に於いては文は始めて自己である。されば、綴方することは自己を建設することであり、學習の綴方は此の時最早一教科の主義、主張ではなく、實に教育完成の爲の主張となる。

前記本62P

論が前後するが、學習の綴方の成立の背景には当時の綴方教育のおかれた実態がある。つまり、「綴方は特殊研究家の手から開放しなければならぬ」「詩の指導はわからないとかむづかしいといつて、放り出して顧みない人達」(「児童文集の研究」その2)17・18P 高橋啓吉とか、副田氏のことを借りるならば、「日本の綴方指導の殆どが有名

無名の文學者であり、文學の愛好者であつたといふことは日本の綴方教育の不幸であつた。といふのは、一般教員大衆をして綴方の本當の姿を見誤らせたからである。」「(學習綴方)の實踐へ・副田凱馬・「綴方教程」四四三P所収・昭和十三年」ということになる。さらに副田氏は次のように記している。

一、綴方教科は、一部センチメンタルな文學教師の遊びとして、教育指導當局たる學校長、主事、視學の連中にこの教科を重規<sup>ユビ</sup>させない素因を作つたからといはねばなるまい。上の輕んずるところ下これを輕んずるは又極めて當然の事である。

二、左翼思想の活潑なる時代に於ては一部詩人教師や文學教師達のプロレタリアイデオロギーの上に打立てた兒童の綴方教育が禍して、當局の綴方人への警戒となり、更でだに不振な綴方教育をして愈々不振ならしめた。

(前記本四四五P)

また次のような表現も見られる。

綴方人が專<sup>せん</sup>科的な存在に見られてあつたり、英雄主義<sup>ゆうゆうしぎ</sup>的な綴方人がエラサウナコトをしかめづらしてしゃべってばかりゐるやうな學校

〔兩文集の正しき姿〕副田凱馬・「綴方教程」四七四P所収・傍点……引用者)

以上のことから当時の綴方教育の実態がわかるが、そのことに對し、副田氏はこれではいけないんだ、大衆化<sup>たいしゅうか</sup>ということを出そうとするのである。そしてこの大衆化に最も適當なのが「學習の綴方」であるとしている。

副田氏は昭和十三年當時「小學校の綴方に於ける表現」を「決して文字・語句の文學的表現訓練を目標とした文章指導を第一義としたものでなく、生活語としての文字語句を獲得させ、その使用を自由ならしむる爲の使用訓練を目標とした文章指導でなければならぬ。」とした上で

『かかる意味からして毎日讀方學習に於いて、文字・語句を取扱ひ、其等を使用して短語、短文の構成指導をなさる所の一般教員の方々が「綴方指導は出来ない」等とおっしゃること』がわからないと言つのである。そして、當時の教員が教則を輕蔑し、忘れ勝ちになっていることを憂へ、綴方教育の大衆化は「先づ教則に還れ」、「そして何よりも早く各教科學習と握手せよ、綴方が各教科と連絡され、綴方に各教科のノートが生かされ、ノートさせるやうな氣輕さで綴方指導がなされる時」になされるであらうとしている。

結局、「學習の綴方」はこれまで論述してきたように特殊な情況の下にあつた綴方教育を、教員が誰でもできる、大衆化するための綴方教育にするための具體的な提言であると言えよう。

さて、この「學習の綴方」は後年県内の各地で實踐され文集化されている。Vではそういう「學習の綴方」の系譜に連なる文集を検討することにした。

## V

管見によると「學習の綴方」の系譜に連なる文集として、「すぎのこ」(松原小五年二組・井上甲子先生)・「おたまじゃくし」(大成校・田代徹也先生)・「オアシス」(高城西中・宮園親友先生)がある。

「すぎのこ」については「作文通信」第一号(昭和三十一年十月・鹿児島県作文の会)に次のような記述がある。

ことに井上さんの學級文集「すぎのこ」は版面を入れ、編集一切のことが子どもたちの手で自主的になされている点、「毎日」誌上で絶讃されたのも当然といえよう。

(同書4P)

「すぎのこ」第一号は昭和三〇年十月に出てい、第四号は昭和三十一年

年六月に出ている。(いずれも副田氏蔵)この「すぎのこ」の第二号・第三号・第五号のいずれかが学習作文の特集号と思われるが、一号・四号の内容や発刊時期を考えると、どうも五号がその特集号であった可能性が高い。(副田氏によると井上甲子先生は千葉県で健在だが、「すぎのこ」や関連資料は持っておられないとのことである。当時の子供たちが保存しておれば、今から出てくる可能性がある。)しかしながら現在のところ未見である。

次に「おたまじゃくし」について検討しよう。「最近に於ける縣下詩文集」(木下壽久・「鹿兒島教育」・55P所収・昭和十四年六月)において詳しく紹介されている。その第八号は指導者田代徹也氏が専攻科にはいり子供たちと別れたので、別れの詩文集として編まれている。「教育も教師も事務化したと言はれる今日かうした良心的な同志を持つ事は喜びに堪へない。壁頭に掲げられた理科勉強の綴方『秋分から冬至まで』に於ける田村俊一郎の温度の移り、馬場透の影の長さの移り、鶴藤正二の日の出の移り、の三篇は實に構築された学習の綴方として憎らしい程に正しい歩みをしてゐると思ふ。」(同書58P・傍点……引用者)

昭和九年十二月「我等の學園」で「學習の綴方特輯号」が出て五年、「學園の綴方」は一般的な概念になり実践されているのである。

「おたまじゃくし」においては學習の詩もでている。

そろばんの時間

小蘭実満

先生が「用意」と言った。

みんなそろばんを横にたおして

ざらざらといわせた。

「二ーたす、二ー」と先生が言う。

みんな、

かたっ かたっ といわせる。

よい音だ。

先生のは大きなそろばんだ。

大きくひびく。

『「おたまじゃくし」のおもいで・田代徹也・「南方三人集」52P所収』同じように學習の詩「呉鳳」「国史の時間」も掲載されている。田代氏は次のように記述している。

よい詩や文が、教室の學習の中からどしどし生まれなければならない。とわたくしは思っていました。教室は子どもたちが多くの時間をすごす生活の舞台であり、學習はきわめて積極的な知的生産の活動で、その過程や結果を詩や文の素材として取り上げ、生活的に反すうさせ、再構成させる効果に期待をかけたのです。

(「南方三人集」53P)

文については「けさの自習」という作品が掲載されている。(同書九十八・九・百P)これは「おたまじゃくし」第七号に「朝目習を考ふる」として掲載された作品である。この作品は「綴方読本・下巻」の中で百田宗治が文話と解説を書いているとあり(「南方三人集」一〇三P)、その中の「教師のための解説と批評」で百田は「全体の學習態度を促進せしめるための一種の基底作業としての綴方科の価値がもっとひろく認められ、それが利用される日が一日も早く到来することを望む理由である。」と記している。(同P)

さて副田氏の「學習の綴方」との関わりについて、筆書の問い合わせ(書簡・昭和十年前後副田凱馬氏が「學習の綴方」を唱えておられたが、そのことをご存じでしたか。)に対し、田代氏からの返信は次のようなものであった。

私が副田先生方の仲間に入れてもらったのは昭和十一年で、御会いし

たはじめから先生の主張される「学習の綴方」のことは度々御聴きし、綴方の取材範囲などについて、新しい眼を開かれ、私なりに実践にふみ込んでいったわけです。

(田代氏書簡)

つまり、「おたまじゃくし」の学習の詩も文も、副田氏の「学習の綴方」の系譜にあるものと考えていいのである。「おたまじゃくし」の論考はかなり大ざっぱになってしまったが本稿執筆時、田代氏との面談をしていないし、「おたまじゃくし」の原本を見る機会も得ていないので、後日、不備を補いたい。

次に「オアシス」<sup>注6</sup>を検討したい。「オアシス」は高城西中生徒会によって発行されたものである。創刊は昭和二十五年二月である。それから毎年三月に発行され十一月号は昭和三十五年三月に出されている。この内、第七号が学習作文号として出ている。目次の中に囲んだ枠があり、そこに学習のための作文という見出しがあり、各教科ごとに生徒の作文と、それに対する顧問(生徒会が主体で発行していることから各教科部の先生は顧問となったという)のかなり長い指導言が掲載されている。生徒の作品の質の高さもさることながら、顧問の先生方の指導言も的確で、かなり高度なものである。

第八号(昭和三十二年三月)は学習作文を含む号になっている。目次に「文」(一般作文のことか)と「学習作文」とあり、「学習作文」として「私達の国語学習」「秀吉の政治」「私の習字練習」「描く楽しみ」「私の英語学習」の五点が掲載されている。

「オアシス」第七号のあと書きで宮園親友氏は次のように記述している。

作文することによって、生活を反省し、組織し、鍛え、より意欲的に向上せしめるのが最終の目的であるならば、学生である皆さんは、作文することによって、学習を反省し組織し、鍛え、向上せしめることも出

来得る筈と思う。——略……引用者——教科学習の過程における、方法は勿論、苦しみや悩みが如実に表現されているから、同時に、こうして書いてみることによって、自分の学習そのものが、反省され、確かめられ、さらに組織されてゆく事もわかってほしい。

(第七号 70 P)

「オアシス」第七号「学習作文号」を読んだ副田氏は「オアシス」第八号で次のように記述している。

二十何年前、私が始めて「学習の綴方」を唱えて「学習の綴方号」を出してから、恐らく全教科の作文を一つの文集に集めたのはこれが始めてではないでしょうか。——略……引用者——「見ろ、やっぱり作文は国語や社会科の先生方のものだけではなくたぞ。各教科担任の先生方のこのスバラシイ言葉に聞け、ここからホントの学習も教育も生まれるのだ。」(第八号 7 P)

「オアシス」十一号に当時水引中に勤務していた宮園氏は「オアシスのこと」と題する文を寄稿している。この中で第七号の反響や作品のその後について触れている。

宮園氏は筆者との面談の中で学習作文は「綴方教程」(百田宗治・昭和十三年)の中の副田氏の論文(「学習綴方」の実践へ)に啓発された旨述べられた。また八号に対する副田氏の寄稿から考えても、副田氏の綴方の系譜にあるものと考えてよい。

さて学習作文の流れは、昭和三十一年になり、鹿児島県国語教育研究会の「国語通信 No.三」の作文班の記録のところに、次のような形でてくる。

。作文は国語科だけのものではなく、全学科のものであり、学校生活、家庭生活、社会生活の中から生まれるものである。

。担当学科の作文は、自分の学習指導の最もよい評価になる。



国語科以外の教科での作文は「国語 No.15 作文 No.3 通信」(昭和三十三年二月)に取り上げられている。

。作文は他の教科でもりっぱに利用できる。

。作文をとりいれたために、その教科の学習が非常に生かされた。

。教科の主体性を見失ってはならない。作文はあくまでも補助的な手段である。

。教師の意図、あるいは教材のねらいによって、導入・展開・整理の中にありこんでいくべきである。(同書 8・9 P)

さらに「国語通信 第25号」(昭和三十七年三月)において四元明朗氏(花尾小)は「文集活動を全教科に生かそう」という提言をしている。また、同通信において「子供と共に」と題して堂地久子氏は概略次のように記述している。

①作文は国語教師だけの占有物ではない。

②小説家養成学校ではないとって一笑に付す方もおるが、教科担任制の中学校に於ては他の教科の先生も作文を通して子供の物の見方考え方を育ててほしい。たとえば理科の先生が実験観察をレポートさせたり、数学の先生が証明法を作文させたり、職家の先生が實習の記録をとらせたりすれば子供の将来は明るいものになる。(同書 66 P)

ところで、近年「学習作文」という語を目にすることがあるが、それは国語科の枠内にとどまっており、発想に一部同じものがみられるが、これまで見てきた歴史的な流れに位置づけることが困難であることから、考察の対象とはしなかったことを付け加えておきたい。

昭和三年には六十二学級・児童数三千七百名・職員数七十二名であった鹿兒島尋常高等小學校は、高等科が分離し一〇〇号発行(昭和十年七月)時には鹿兒島尋常小學校となり児童数二千四百名・職員数四十八名となっている。しかしこれでも大規模校である。兼子校長という一代の名校長の下、全国にその名が知れわたっていたのである。

如何なる前世の因縁か、はからずも全国に其の名も高き金子校長先生の御膝下に轉任を命ぜられ——略……引用者——見るもの聞くもの總てが大きく、而も強く、内容と形式之が如何にも融通して統一あり、進展して止まざる不可抗の前進の姿而も人格圓滿な金子先生——略……引用者——

山元 智

一二四号(昭和七年十二月) 75 P

校長先生は常に「日本一の形を日本一の質にまで」とおっしゃっておられます。私等職員一同はそれを目標としまして獻身的に努力を惜ず務めて來ました。

吉田義則

同号 67 P

すばらしい校長の下、職員は「自學自習」「學習法の會得」「學習態度の樹立建設」を求めて研究を重ねていた。しかしながら、副田氏にとつては先に論究したように綴方教育に対する偏見もあり、必ずしも満足できる状況ではなかったのであろう。だから「教則に還れ」と声を大にして叫び、綴方教育が、いわれなき偏見にさいなまれていたことを打開するために番号作文を大衆化の一方策として位置づけているのである。さらに「学習の綴方」の成立背景について次のように記している。

「学習の綴方」を主張するに当り、私たちがその寄りどころとしたものを掲げるとそれは、私たちのよき指導者であり、鹿兒島県教育の父で

もあつた我等の鹿児島尋常小學校長故兼子鎮雄先生の「学習指導」の「学習態度の確立」の章であつた。

(『学習の綴方を語る』「鹿児島国語教育」第四号・昭和三十一年八月・19・20 P)

「学習指導」は大正十二年十月に出されている。大正八年に市尋高に赴任した兼子校長は大正十一年三十周年記念号において、「日本一の形を日本一の質にまで」という標語をたて事ある毎にこの語を職員・児童に話している。その具体的な方策を表わしたのがこの「学習指導」と考へることができる。「学習態度の確立」は同書32 P、36 Pにある。すなわち、「創作・発動・努力の三つはすべての学習を通じて流るる心理的特徴である、学習は其主要的態度としてこの三つの訓練を要する」とし、それぞれを細説し「学習生活は修養生活である。此修養的な学習生活には個別的な獨自学習と社會的な共同学習とがある。獨自学習の中心態度は自立である。共同学習の中心態度は協同である。」として、自立的態度と協同的態度について細説している。

ところで番号作文はまだ兼子校長の頃の創案であるが、「学習の綴方」は橋口校長になってからの主張である。しかしながら、これまで論述してきたことからわかるように、兼子校長の學校経営―教育の理想―の中から生まれたものとしても過言ではない。副田氏は『学習の綴方』とは――略：引用者――常に人生と、社会と生活と研修に取組み前進する人間の、児童生徒の生き方を、生活態度を記録して吟味し、学習することによって、更に一段とその生活態度を高めていこうと云う人間形成のための綴り方教育の主張なのである。』(『学習の綴り方を語る』21 P)と規定している。全国の綴り方教育界に対し「学習の綴方」の旗を振ったことは確かであるが、県内を除いて、それがどう実践されたかは現在のところ皆目不明である。今後の課題にしたい。県内の実践家達に与え

た影響はVにおいて論述したが、「我等の學園」そのものが当時の鹿児島県のリーダーたる存在であつたことは想像に難くはない。そして、その編集方針・詩話・文話・評語の類が啓蒙的な意義を持ったに違いない。記録に残っている(『綴り方教育』「鹿児島教育」)県内詩文集は昭和五年から昭和十四年にかけて二十七点もある。戦火に焼かれたものもあろうが、発掘に努力したいと考えている。

ところでこの「学習の綴方」の現代的意義は、方法上の提案として、十分通用するというより、現在行なわれている作文教育の限界をおし広げるものとして実践化を図りたいものである。その実践化を阻害するものは、おそらく教師一人の裁量ではどうにもならないような教育課程の厳密さであり、また「学習の綴方」として綴るに価しないような授業であろう。学級文集・學校文集が単に文集としてのレベルにとどまらず、テキストとして活用されるような生かされ方が一般化すれば、学習作文は全教科を統合する学習のための作文として位置づけられよう。

「番号作文」は入門期の子供たちに、これ以上の能率のよい方法は考えられないほど、文章を書くことの楽しさを教えるものと考えられる。現在、実践されているということを聞かないので、早速教育学部の卒業生によびかけて、実践して、その結果をまとめたいと思っている。

注1 ここでいう体裁とは文集をテキストとして使用できるという意味である。

副田氏は「編輯所感」(出典不明：別刷)で「文集使用」として、次の二点をあげている。

1、教科書として——鑑賞・批評

2、ノートとして——批評・訂正

注2 「檜舞臺へ」副田凱馬(「驥歩」73P所収・鹿児島綴方教育研究会)

注3 注2同書71P

注4 消化学習とはおそらく副田氏の造語であろう。その意味するところを次のように記している。

勿論、国語の学習で文字や語句の読み方、書き方、その意味や使い方など一通りの学習はなされるのだが、それは理解学習としてなされるのであって、それを身に付けさせて、作文に機能させるための消化学習にまで至っていないのである。(傍点引用者)「番号作文について」(「国語教育実践の開拓」67P 明治図書)

注5 「毎日新聞」の地方版の昭和三十一年前後のものに掲載されているに違いないと思う、毎日新聞西部本社調査部に調査を依頼したが、その頃のものには西部本社が火事に会いすべて焼失しているとのことであった。転載されたものは「国語通信」(No.11・昭和三十一年・鹿児島県国語教育研究会)の33Pに「すぎのこの子供たち」としてある。

注6 宮園親友の学校文集「オアシス」は毎号なかなか充実したアカヌケした編集だが、特に三〇年度号は「学習作文特集号」として、名教科での学習記録の作文をとりあげ、それぞれの専門の先生の感想・講評を載せている。副田凱馬のいわゆる「学習の綴方」の方向にあるものとして、その野心的意図は賞讃に値する。(「作文通信」第一号7P・鹿児島県作文の会)

注7 「番号作文について」副田凱馬(「国語教育実践の開拓」明治図書 66P)に次のような記述がある。

一般的に教師にも子供たちにも苦手で喜ばれない作文学習において「躍る心」を学習の土台に据えるということは、きわめて重要なことである。また「大衆化」について副田氏は「一般化」という語を用いたとされるが、

当時の氏の論文中的語「大衆化」に従った。